

# 一房の葡萄

有島武郎

青空文庫



僕は小さい時に絵を描くことが好きでした。僕の通つていた学校は横浜よこはまの山の手やまてという所になりましたが、そこいらは西洋人ばかり住んでいる町で、僕の学校も教師は西洋人ばかりでした。そしてその学校の行きかえりにはいつでもホテルや西洋人の会社などがならんでいる海岸の通りを通るのでした。通りの海添いに立って見ると、真まっさお青さおな海の上に軍艦だの商船だのが一ぱいならんでいて、煙突から煙の出ているのや、檣ほぼしらから檣ほぼしらへ万国旗をかけたわたしたのやがあつて、眼まなこがいたいように綺麗きれいでした。僕はよく

岸に立つてその景色を見渡して、家に帰ると、覚えているだけを出来るだけ美しく絵に描いて見ようとしました。けれどもあの透きとおるような海の藍色と、白い帆前船などの水際近くに塗つてある洋紅色とは、僕の持っている絵具ではどうしてもうまく出せませんでした。いくら描いても描いても本当の景色で見るとような色には描けませんでした。

ふと僕は学校の友達の間持っている西洋絵具を思い出しました。その友達は矢張西洋人で、しかも僕より二つ位齡が上でしたから、身長は見上げるように大きい子でした。ジムというその子の持っている絵具は舶来の上等のもので、軽い木の箱の中に、十二種の絵具が小さな墨のように四角な形にかためられて、二列にならん

でいました。どの色も美しかったが、とりわけて藍と洋紅とは喫くつくり驚するほど美しいものでした。ジムは僕より身長せいが高いくせに、絵はずっと下手へたでした。それでもその絵具をぬると、下手な絵さえがなんだか見ちがえるように美しく見えるのです。僕はいつでもそれを羨うらやましいと思っていました。あんな絵具さえあれば僕だつて海の景色を本当に海に見えるように描かいて見せるのになあと、自分の悪い絵具を恨みながら考えました。そうしたら、その日からジムの絵具がほしくってほしくってたまらなくなりました。けれども僕はなんだか臆おくびよう病びょうになってパパにもママにも買って下さいと願う気になれないので、毎日々々その絵具のことを心の中で思いつづけるばかりで幾日か日がたちました。

今ではいつの頃ころだったか覚えてはいませんが秋だったのでしょう。葡萄ぶどうの実が熟していたのですから。天気は冬が来る前の秋によくあるように空の奥の奥まで見すかされそうに霽はれわたった日でした。僕達は先生と一緒に弁当をたべましたが、その楽しみな弁当の最中でも僕の心はなんだか落着かないで、その日の空とはうらはらに暗かったのです。僕は自分一人で考えこんでいました。誰たれかが気がついて見たら、顔も屹きつと度青あざかったかも知れません。僕はジムの絵具がほしくってほしくってたまらなくなってしまうたのです。胸が痛むほどほしくなってしまうたのです。ジムは僕の中うちで考えていることを知っているにちがいないと思つて、そつとその顔を見ると、ジムはなんにも知らないように、面白そう

に笑ったりして、わきに坐すわっている生徒と話はなしをしているのです。でもその笑っているのが僕のことを知っていて笑っているようにも思えるし、何か話をしているのが、「いまに見ろ、あの日本人が僕の絵具を取るにちがいないから。」と喋っているようにも思えるのです。僕はいやな気持ちになりました。けれどもジムが僕を疑っているように見えれば見えるほど、僕はその絵具がほしくてならなくなるのです。

## 二

僕はかわいい顔はしていたかも知れないが体からだも心も弱い子でし

た。その上、臆病者おくびようもので、言いたいことも言わずにすますような質たちでした。だからあんまり人からは、かわいがられなかつたし、友達もない方うばでした。昼御飯がすむと他の子供ほか達は活潑かつぱつに運うんど動場うばに出て走りまわって遊びはじめましたが、僕だけはなおきからその日は変に心が沈んで、一人だけ教場きょうじょうに這入はいっていました。そとが明るいだけに教場の中は暗くなつて僕の心の中のようにでした。自分の席すわに坐つていながら僕の眼は時々ジムの卓テイブルの方に走りました。ナイフで色々ないたずら書きが彫りつけてあつて、手垢てあかで真黒まつくろになつてゐるあの蓋ふたを揚あげると、その中に本や雑記帳せきばんや石板せきばんと一緒にあつて、飴あめのような木の色の絵具箱があるんだ。そしてその箱の中には小さい墨のような形をした藍や洋紅の

絵具が……僕は顔が赤くなつたような気がして、思わずそつぽを向いてしまうのです。けれどもすぐ又横眼でジムの卓テーブルの方を見ないではいられませんでした。胸のところがどきどきとして苦しい程ほどでした。じつと坐つていながら夢で鬼にでも追いかけられた時のように気ばかりせかせかしていました。

教場に這入はいる鐘がかんかんと鳴りました。僕は思わずぎよつとして立上りました。生徒達が大きな声で笑つたり唶どな鳴つたりしながら、洗面所の方に手を洗いに出かけて行くのが窓から見えました。僕は急に頭の中が氷のように冷たくなるのを気味悪く思いながら、ふらふらとジムの卓テーブルの所に行つて、半分夢のようにその蓋を揚げて見ました。そこには僕が考えていたとおり雑記帳や鉛

筆箱とまじって見覚えのある絵具箱がしまつてありました。なんのためだか知らないが僕はあつちこちを見廻みまわしてから、誰も見ていないと思うと、手早くその箱の蓋を開けて藍と洋紅との二ふた色いろを取上げるが早いかポケットの中に押込みました。そして急いでいつも整列して先生を待っている所に走って行きました。

僕達は若い女の先生に連れられて教場に這入り銘々の席に坐りました。僕はジムがどんな顔をしているか見たくつてたまらなかつたけれども、どうしてもそつちの方をふり向くことができませんでした。でも僕のしたことを誰も気のついた様子がないので、気味が悪いような、安心したような心持ちでいました。僕の大好きな若い女の先生の仰おつしることなんかは耳に這入りは這入つてもな

んのことだかちつともわかりませんでした。先生も時々不思議そうに僕の方を見ているようでした。

僕は然し<sup>しか</sup>先生の眼を見るのがその日に限ってなんだかいやでした。そんな風で一時間がたちました。なんだかみんな耳こすりでもしているようだと思いながら一時間がたちました。

教場を出る鐘が鳴ったので僕はほっと安心して溜<sup>ため</sup>息<sup>いき</sup>をつきました。けれども先生が行ってしまうと、僕は僕の級<sup>きゅう</sup>で一番大きな、そしてよく出来る生徒に「ちよつとこつちにお出<sup>い</sup>で」と肱<sup>ひじ</sup>の所<sup>を</sup>掴<sup>つか</sup>まれていました。僕の胸は宿題をなまけたのに先生に名<sup>な</sup>を指<sup>さ</sup>された時のように、思わずどきんと震えはじめました。けれども僕は出来るだけ知らない振りをしていなければならぬと思つて、

わざと平気な顔をしたつもりで、仕方なしに運動場の隅すみに連れて行かれました。

「君はジムの絵具を持ってきているだろう。ここに出し給たまえ。」

そういつてその生徒は僕の前に大きくひろ拡げた手をつき出しました。そういわれると僕はかえつて心が落着いて、

「そんなもの、僕持つてやしない。」と、ついでたらめをいつてしまいました。そうすると三四人の友達と一緒に僕の側そばに来ていたジムが、

「僕は昼休みの前にちゃんと絵具箱を調べておいたんだよ。一つも失なくなつてはいなかつたんだよ。そして昼休みが済んだら二つ失くなつていたんだよ。そして休みの時間に教場にいたのは君だ

けじやないか。」と少し言葉を震わしながら言いかえました。

僕はもう駄目だと思ふと急に頭の中に血が流れこんで来て顔が真赤まっかになつたようでした。すると誰だつたかそこに立っていた一人がいきなり僕のポケットに手をさし込もうとしました。僕は一生懸命にそうはさせまいとしましたけれども、多勢たせいに無勢ぶせいで迎も叶かないません。僕のポケットの中からは、見る見るマール球だま（今のビー球だまのことです）や鉛のメンコなどと一緒に二つの絵具のかたまりが掴み出されてしまいました。「それ見ろ」といわんばかりの顔をして子供達は憎らしそうに僕の顔を睨にらみつけました。僕の体からだはひとりでにぶるぶる震えて、眼の前が真暗まっくらになるようでした。いいお天気なのに、みんな休時間を面白そうに遊び廻つ

ているのに、僕だけは本当に心からしおれてしまいました。あんなことをなげしてしまつたんだろう。取りかえしのつかないことになつてしまつた。もう僕は駄目だ。そんなに思うと弱虫だつた僕は淋しく悲しくなつて来て、しくしくと泣き出してしまいました。

「泣いておどかしたつて駄目だよ。」とよく出来る大きな子が馬鹿にするような憎みきつたような声で言つて、動くまいとする僕をみんなで寄つてたかつて二階に引張つて行こうとしました。僕は出来るだけ行くまいとしたけれどもとうとう力まかせに引きずられて階子段はしごだんを登らせられてしまいました。そこに僕の好きな受持ちの先生の部屋へやがあるのです。

やがてその部屋の戸をジムがノックしました。ノックするとは這入<sup>はい</sup>つてもいいかと戸をたたくことなのです。中からはやさしく「お這入<sup>はい</sup>り」という先生の声が聞えました。僕はその部屋に這入る時ほどいやだと思つたことはまたとありません。

何か書きものをしていた先生はどやどやと這入つて来た僕達を見ると、少し驚いたようでした。が、女の癖に男のように頸<sup>くび</sup>の所でぶつりと切つた髪の毛を右の手で撫<sup>な</sup>であげながら、いつものとおり<sup>ちよつと</sup>のやさしい顔をこちらに向けて、一寸首<sup>ちよつと</sup>をかしげただけで何の御用という風をしなさいました。そうするとよく出来る大きな子が前に出て、僕がジムの絵具を取つたことを委<sup>くわ</sup>しく先生に言いつけました。先生は少し曇つた顔付きをして真面目<sup>まじめ</sup>にみんなの

顔や、半分泣きかかっている僕の顔を見くらべていなさいました  
が、僕に「それは本当ですか。」と聞かれました。本当なだけで  
れども、僕がそんないやな奴やつだということはどうしても僕の好き  
な先生に知られるのがつらかったのです。だから僕は答える代り  
に本当に泣き出してしまいました。

先生は暫しばらく僕を見つめていましたが、やがて生徒達に向つて静  
かに「もういつてもようございます。」と行って、みんなをかえ  
してしまわれました。生徒達は少し物足らなそうにどやどやと下  
に降りて行ってしまいました。

先生は少しの間なんとも言わずに、僕の方も向かずに自分の手  
の爪を見つめていましたが、やがて静かに立つて来て、僕の肩かたの

所を抱きすくめるようにして「絵具はもう返しましたか。」と小さな声で仰おつしやいました。僕は返したことをしつかり先生に知ってもらいたいので深々と頷うなずいて見せました。

「あなたは自分のしたことをいやなことだっただだと思っ  
ていますか。」

もう一度そう先生が静かに仰つた時には、僕はもうたまりませ  
んでした。ぶるぶると震えてしかたがない唇くちびるを、嚙かみしめても嚙  
みしめても泣声が出て、眼からは涙がむやみに流れて来るのです。  
もう先生に抱かれたまま死んでしまいたいような心持ちになつて  
しまいました。

「あなたはもう泣くんじやない。よく解わかつたらそれでいいから泣

くのをやめましよう、ね。次ぎの時間には教場に出ないでもよろしいから、わたくし私のこのお部屋に入らっしゃい。静かにしてここに入らっしゃい。私が教場から帰るまでここに入らっしゃいよ。いい。ながいすと仰りながら僕を長椅子に坐らせて、その時また勉強の鐘すわがなつたので、机の上の書物を取り上げて、僕の方を見ていられたが、二階の窓まで高くは這あがい上つた葡萄蔓ぶどうづるから、一房ひとつぶの西洋葡萄をもぎつて、しくしくと泣きつづけていた僕の膝ひざの上にそれを置いて静かに部屋を出て行きなさいました。

一時いちじがやがやとやかましかつた生徒達はみんな教場きょうじょうに這入はいつて、急にしんとするほどあたりが静かになりました。僕は淋さびしくつて淋しくつてしようがない程ほど悲しくなりました。あの位好きな先生を苦しめたかと思うと僕は本当に悪いことをしてしまったと思いました。葡萄ぶどうなどは逆とくても喰たべる気になれないでいつまでも泣いていました。

ふと僕は肩を軽くゆすぶられて眼をさましました。僕は先生の部屋へやでいつの間にか泣寝入りをしていたと見えます。少し瘦やせて身長せいの高い先生は笑顔えがおを見せて僕を見おろしていられました。僕は眠つたために気分がよくなって今までであったことは忘れてしまつて、少し恥しそうに笑いかえしながら、慌あわてて膝の上から這すべり

落ちそうになっていた葡萄の房をつまみ上げましたが、すぐ悲しいことを思い出して笑いも何も引込んでしまいました。

「そんなに悲しい顔をしないでよろしい。もうみんなは帰ってしまいましたから、あなたはお帰りなさい。そして明日はどんなことがあっても学校に来なければいけませんよ。あなたの顔を見ないと私は悲しく思いますよ。屹度ですよ。」

そういつて先生は僕のカバンの中にそつと葡萄の房を入れて下さいました。僕はいつものように海岸通りを、海を眺めたり船を眺めたりしながらつまらなく家に帰りました。そして葡萄をおいしく喰べてしまいました。

けれども次の日が来ると僕は中々学校に行く気にはなれません

でした。お腹なかが痛くなればいいと思ったり、頭痛がすればいいと思ったりしたけれども、その日に限って虫歯一本痛みもしないのです。仕方なしにいやいやながら家いえは出ましたが、ぶらぶらと考えながら歩きました。どうしても学校の門を這入ることは出来ないように思われたのです。けれども先生の別れの時の言葉を思い出すと、僕は先生の顔だけはなんとといっても見たくてしかたがありませんでした。僕が行かなかつたら先生は屹度悲しく思われるに違いない。もう一度先生のやさしい眼で見られたい。ただそのひとごと一事があるばかりで僕は学校の門をくぐりました。

そうしたらどうでしょう、先まず第一に待ち切っていたようにジムが飛んで来て、僕の手を握ってくれました。そして昨日きのうのこと

なんか忘れてしまったように、親切に僕の手をひいてどぎまぎしている僕を先生の部屋に連れて行くのです。僕はなんだか訳がわかりませんでした。学校に行ったらみんなが遠くの方から僕を見て「見ろ泥棒の<sup>うそ</sup>嘘つきの日本人が来た」とでも悪口をいうだろうと思っていたのにこんな風にされると気味が悪い程<sup>ほど</sup>でした。

二人の足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に、戸を開けて下さいました。二人は部屋の中に這入りました。

「ジム、あなたはいい子、よく私の言<sup>わたくし</sup>ったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまって貰<sup>もら</sup>わなくなってもいいと言っています。二人は今からいいお友達になればそれでいいんです。二人とも上<sup>じょうず</sup>手に握手をなさい。」と先生はにこにこしながら

ら僕達を向い合せました。僕はでもあんまり勝手過ぎるようでもじもじしていますと、ジムはいそいそとぶら下げている僕の手を引張り出して堅く握ってくれました。僕はもうなんといいってこの嬉しさを表せばいいのか分らないで、唯恥しく笑う外ありませんでした。ジムも気持よさそうに、笑顔をしていました。先生はにこにこしながら僕に、

「昨日の葡萄はおいしかったの。」と問われました。僕は顔を真赤つかにして「ええ」と白状するより仕方がありませんでした。

「そんなら又あげましょうね。」

そういって、先生は真白まっしろなリンネルの着物につつまれた体からだを窓からのび出させて、葡萄の一房をもぎ取って、真白まっしろい左の手

の上に粉のふいた紫色の房を乗せて、細長い銀色の鉢はさみで真中まんなかからぷつりと二つに切つて、ジムと僕とに下さいました。真白い手ての平ひらに紫色の葡萄の粒が重つて乗つていたその美しさを僕は今でもはつきりと思い出すことが出来ます。

僕はその時から前より少しい子になり、少しはにかみ屋でなくなつたようです。

それにしても僕の大好きなあのいい先生はどこに行かれたでしょう。もう二度とは遇あえないと知りながら、僕は今でもあの先生がいたらなあと思います。秋になるといつでも葡萄の房は紫色に色づいて美しく粉をふきますけれども、それを受けた大理石のような白い美しい手はどこにも見つかりません。





## 青空文庫情報

底本：「赤い鳥傑作集」新潮文庫、新潮社

1955（昭和30）年6月25日発行

1974（昭和49）年9月10日29刷改版

1984（昭和59）年10月10日44刷

初出：「赤い鳥 第五卷第二号」

1920（大正9）年8月

※表題は底本では、「一房《ひとふさ》の葡萄《ぶどう》」となっています。

入力：鈴木厚司

1999年2月13日公開

2018年10月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 一房の葡萄

有島武郎

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>